

---

# 伏竜天晴222～(2)吳との再同盟～

K-hell

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

伏竜天晴222～（2）吳との再同盟

### 【NZコード】

N92870

### 【作者名】

K - heel1

### 【あらすじ】

かなりパラレルな三国志第二弾。吳との再同盟の使者に推薦された黒星は、吳の国であつた女装娘の陸遜に一眼ぼれ、ただしモリトはクゼを交渉の道具程度にしかみてません。登場キャラ 姜維伯約、陸遜伯言、李封忠徳、嚴顥、楊儀威光、張紹星姫、黃月英、諸葛亮孔明、？之伯苗、丁奉承淵、周循、関索維之（張虎）、陳祇奉宗

序へ「え…えうう意味だ？」

と陸遜リクソン、ゴスロリ装いツーサイドアップの男の子は上擦つた声で才ウム返ししてきました。

「もう一度聞くが、お前は俺様の事が『好き』なのか？」

どういう意味で、と聞かれても僕自身わかりませんよ。『好き』って言葉に理由がいるのでしょうか。リクソンさんはニヒルに笑います。

「ケケ…真っ赤なリングっぽっぺが…子供め」

ぼ、僕は22歳の大人なのに…ひどい言われ様です…（ぐすん）。でも、彼は可愛いのです クゼは県の若い大都督さまでした。

壱リホウへ最近、李封リホウが口づるさい。僕が数ヶ月前から蜀軍の陣中へ足を運ぶようになつてからです。

今日も僕は、嚴顔老將軍に武芸の稽古を受け、滝壺に落とされました。へくしゅつ…寒いです。晚春とは言え、蜀は山に囲まれた盆地。だから、例年寒いのです。おお、リホウがまた老將軍に食い下がつてますよ。

「だ・か・ら～ 何度もいいますけどね、将軍。もし、この娘に何かあつたら国家レベルの危機なんですよー国難ですっー！良いんですかつ高血圧で倒れても知りませんよーーー！」

必死に身振り手振り、そして意味不明な例えを交えるリホウ。ああ相手にされてない感じですね。じじさまは耳をほじほじ、空を見上げてます。三文コントの終わりはじじさまが「喝つーー！」とリホウを一蹴して終わりになります。

いつも通りタイミングを合わせて両手で耳を塞ぐ僕。対称的にいつも通りリホウは脳震盪を起こして、てんてこ舞いです。

結局、僕はリホウに首根っこを掴まれ、引きずり退場。前にツインテールの髪を引っ張られた時よりマシだつたけど、やっぱり窒息しつきました。涙目けほけほ。

リホウは僕に容赦ないです。まあ彼がクゼの保護者ですから。無言の白けている視線が痛いです。

「むうう、僕はもう20歳過ぎてるから、ただの大人じゃんっ！！  
過保護の鬼いいーーー！」

「過保護の鬼で結構だ。クゼ、お前は自分の立場を理解して行動しているか？それとも『未来史を知っている』ってだけじゃ役立たずだつてやつと気付いた事は褒めてやるが…」

褒めてやる、その後の沈黙は嵐の前。リホウの眉間に動きます。

「しかしだ！俺（親）の名前を使って、兵部や吏部、尚書に侵入するな！確かに前はただの人と気付いた。されど『ただの人』だ！オールライ？」

リホウ、熱すぎ。それと僕が初対面のとき散々罵ったのを絶対根に持っているよね。カウンターはご法度な早口だもん。

それに僕が内政や軍事の事に興味を持つてもいいじゃん、少しくらいいいじやんか。アヒル口ですねる。

「そういうところがまだまだお子様なんだよ。社会に適合しなさい」

デコピングで額をはじかれた。イタイ。僕は若い芽を摘み取るリホウの行為に異議を申し立てます。良い大人が悩める隣人を小馬鹿にするだけで助けない世の中は『友愛』の精神に反します。ダーク発動状態のクゼになります。

「あれえリホウさん、これは保護者による児童虐待（DV）ですか？たかがデコピング一発、されど一発は一発ですよねえ。吏部に訴えるよ（笑）」

もつ子供でいいや。反撃開始ですです。リホウのスーパー土下座タイムは長いんで、僕は審議拒否します。

さよならーと普段なら逃げるのですが、しかし今日はタイミング悪くお客様が誰かいらっしゃったようでした。結構真面目で有名な楊儀尚書侍郎が僕らの前に現れました。

リホウは先程までの話の流れから罰の悪い表情でした。けれど、話の矛先は僕のようでした。僕は一瞬リホウと目を合わせました。楊侍郎は気難しそうな顔で告げました。

「確かにお伝えしましたぞ。本日、申の刻尚書令室へ来るよう、尚書令が貴女様に命じております」

仕事人の使いは足早に去っていきました。どうして僕なのでしょうか。しかも、あのキャラアーウーマン張紹星姫さんが尚書令で証人喚問なのですから。クゼは焦ります。

「…だが、裁判沙汰なら刑部、軍関係なら兵部だ<sup>みうち</sup>」

リホウはいつもの虚無的な表情に戻っています。というから裁判じゃないのは確かだけど。

「あの女六部長官は言葉で人を殺せるな。俺も酷いめにあつたものだ。残念だがクゼが生き残る確率は限りなくゼロに近い…」

細田でわざとらしくふうっと息を吐くリホウ。僕は泣きそうです。

「ひどっ！ 励ましてよ、なんか凄い不安だよぅ」

「とつあえず、星姫様の前でお前が天然ボケを食らわすのは間違いない。失笑されて終わりだから、後は野となり山となる。クゼはやればできる娘だ！」

「そりそり、僕は天然ボケでやればできる娘つて、楽観的すぎるよーー！」

それでも偽趙雲だったことをリホウが皆に暴露したときよりマシだね。あのときだって、文句言う人はいても丸く収まつたし。世の中狭い狭い。クゼは無理やり自分を納得させました。郷に入ったら郷に従うだけです。

式へ申の刻、僕は尚書令室にギリギリ間に合いました。だつて手続きに凄く時間がかかるなんて誰も教えてくれなかつたんですね。ここはマニユアル通り、ノックしてコンコンつと。

「お入りなさい」

快活そうな女性の声が返つてきました。僕はドキマギしながら碧色の絨毯に足を踏み入れました。デスクの上には認可待ちの書類の山です。あれが租税関係ので、あっちが宣旨かな。

その山の向こうにこの部屋の主人が座つていらっしゃいました。やや幼さが残る微笑みを浮かべる貴婦人さまと言いましょうか。ポニーツアップの半結いの髪型と何処となく幼い感じの服装ですね。

僕が人の事言えないんですけど。クゼ天然ボケ発動。

「あのう、僕をお呼びになつた張星姫さんですか？」

本人を前に何を言つてしまつたんだろう（汗）。クゼの馬鹿あつ！セイキさんは口を手で隠して笑っていました。政治家の笑顔は僕には判断し難いです。さらにセイキさんは女性ですし。内で怒つても、表情に曇りがない場合もありますから。

やっぱり謝ろう。セイキさんの視線を感じて、僕の口は噤まれました。妖艶なウインク。

「姜伯約さん、面白い子ね。流石に兵部の帳簿をシュレッターにかけて、一刻ばかりで改定版を作るだけの神童だわ。論点がなかなか良いわ」

そこにつなげますか。僕は困った笑みになります。

というも、間違つて書類を製麺みたいにシュレッターにかけてしまつた事件です。リホウに兵部でジャイアントスイングにかけられたら上、じつひどく叱られました。その後、皆で徹夜つていう黒歴史です。

つまり不都合な真実ですね。リホウの言葉が反芻します。『誠実に受け答えしろ』と。

「話が一人歩きしていますよ……僕はシュレッターにかけて、李將軍に叱られただけです」

クスクス。セイキさんは目を細めて笑います。あれ、僕は何か可笑しいこと言いましたか。

「いいえ、全然。普通は帳簿をシュレッターにかけないもの。尚書（うち）がそんな事したら、半年は机の虫になるわ。でも、貴女の行いは兵部の急け者さん達には良い薬になつたでしょうに。構造改革の功名かしら、兵部の無駄遣いと裏金の流れは把握致しました

?（副音声・使えない役人の何人かはクビね）

まるで僕の失敗が美談ですよ（副音声が恐い）。クゼの笑みは、照れ笑いと苦笑いの半々です。冷や汗はもう結構なので本題を切り出すべきですね。ぴょこんっと拝礼。

「セイキさま、ここに僕をお呼びになつたご用件は何なのでしょうか」

「そうね…」

セイキさんは仕事モードな目に戻り、デスクの上の一束を取りました。そして、傍に控えていた楊侍郎からティーカップを受け取り、気を静めるため一口飲み…

「ヴあちいいいつー！」

ブ　　つと紅茶が霧吹きです。あわわっ書類が、つて侍郎！心配する優先順位がおかしいです。張星姫さんが月間リアクションMVになるのは間違いないでしょ？。セイキさん猫舌事件の犯人はヤス…いえいえ外部の人間でした。

舌が痺れた尚書令代理は、どういう訳か黄工部でした。こうげっぷ黄月英さん

は、巷で有名な天才女発明家です。切れ目で黒髪が美しい長身のお姉さんって感じです。セイキさんはモーモーモーモーおっしゃいました。

「たれが好んであんたなんかに頼む羽田に… 尚書（うしゆ）の職員は全員バックアップ中だし… むうねん…」

涙目で活舌が悪いのでセイキさんが可愛い子に見えました。ゲツエイさんはその可愛い子の頭を撫でていましたが、当のセイキさんは何処となく嫌そうな顔をしていました。

セイキさんのキツイ視線に一瞬一瞬とゲツエイさんは微笑みながら、僕に辞令が下りました。

「姜伯約、私が尚書令室を訪ねるまで待つこと… 諸葛孔明」

うん、また雲行きが怪しくなりましたね。僕の出頭命令は丞相からでした。ここまで推理できても一寸先は闇なのです。パズルはまだ解けません。

丞相がいらっしゃるまで、ゲツエイさんがえつちな話で一人盛り上がりしていましたが、僕の記憶は曖昧なのです。えつちなのはよくないとも思います。

僕の意識は混沌の極みでした。しかし、丞相がいらっしゃつて場の空気は一転しました。

「歴史みりじが存在するならば、それを破壊すること。すなわち歴史を修正して欲しいのです」

丞相のお言葉は比喩でクゼには難しかったです。でも一概にわかりやすい話だけが世の中にあるわけではないですね。

「…おっしゃる意味がわかりません」

丞相はふふっと大人な微笑み。

「貴女めのが天から与えられた役目（天命）は何だと思いますか？」

クゼは馬鹿なので言葉がなかなか思い浮かびません。額から汗が出ます。

「信じて貰えないかもしれませんが、僕は『未来』がわかります。だから僕がお役に立てるとは思えません。両親と同じ様に歴史に抗いたくはありません。それに僕は僕の生き方を決めなくてはならないと思っています」

丞相は僕の頭をその大きな手でそつと撫でてくださいました。肯定も否定もありません。そのせいで僕の胸は苦しくなります。

「親の生き方に苦しめられる貴女と同じ境遇の子に逢つてみたいと思いませんか」

丞相との余話で僕の真意を見られていました。答えは『可愛い子には旅をさせよ』でした。孫県への使者。再同盟をかけた蜀の賭けでした。

僕は翌日、丞相から母の形見の装具『龍胆』を頂きました。この大抜擢にリホウは珍しく褒めてくれました。

不安です。蜀建国の功臣の両親と違い、僕は何もしてないのですから。クゼはやればできる子。もう自分を信じるしかありません。僕の使命が何の役に立つのでしょう。丞相の狙いはこの時のクゼにはわかりませんでした。

参へ船の上ではじよいにいられたのは、ほんの数刻の間でした。

ショートボブの髪型のリホウが僕の護衛の任で一緒にいられるのが

必要以上に嬉しかつたりと僕の感情指数はどこか壊れているなと思つた時点で船酔いレベル5でした。どこが雄大な長江ですか…涙とひどい吐き気の味がします。

団太いリホウは除いて、船員が次々と船酔いの魔の手に呑まれていきます。このままだと交渉以前の問題です。僕はよろよろと立ち上がり、傍にあつた筆を長江に投げ捨てました。ここからが演技者クゼです。

「た、大変です！」

具合悪そうに頃垂れていた僕が突然叫んだので周りの役人たちが驚いて僕を見ます。もはつた。ダーククゼがニヤリとほくそ笑む。  
「丞相から頂いた帝の金印が長江に落ちてしましました！」

みるみる青ざめる役人たち、何だかクゼは申し訳ない気持ちで一杯になります。一人空気に動じないKYが登場しました。リホウです。彼の冷静さは腹立つくらい尊敬しますが、ここは我慢です。

「お前、何騒いでんだ？第一、お前のよつな下つ端に……」

そこまで言つて、はつとりホウは我に返ります。僕が涙目になつてゐるのでした。何も言わずに身につけていた装具をリホウに見せます。

リホウは深読みしきました。丞相からクゼは母親の形見を頂いているんだよな。つまり、クゼには別に密命があるのかもしれない。帝の金印を持つ係とか。リホウは天を見上げ手を額に、やつちまつたぜのポーズ。

深読みが誤認を生み、さらに暴挙になります。リホウは無理を言いました。

「ええい、搜索するぞー！長江の泥水をさわってでも見つけ出せー！」

船に刻みて剣を求む。この人も融通が利きませんね。さて、僕が投げ捨てた筆の持ち主登場です。

「どなたか、私の筆を知りませんか。あのしつくづくる筆ですよ」

対吳全權大使の?<sup>トウシ</sup>えさんです。まだ状況が読めないリホウは「それどころでない」と怒鳴ります。吳越同舟になる前にどつきり種明かしをしましょう。

「あのすみません…高そうな筆で遊んでいたら、つい投げちゃいました」

僕はトウシさんの筆を投げたのでした。帝の金印なんて下級の僕が持つてませんよ。リホウはがくりと肩を落としました。

「ええっ！それは私が帝より拝借して保管していますよ。ところで李將軍は何をお探しですか。私の筆を探して頂けると幸いです」

蜀の船員が全員ほつとしました。その後でリホウに陰に連れて行かれ僕は3発ゲンコツを食らいました。この3発で皆さんの緊張が解けたなら本望です。

四ゝ呉都南京、一宮の乱の後に遷都された言わすとも知られた呉の都です。水流網を活かした商人の町です。もうハイカラなものが右を見て左を見ても一杯で目移りします。蜀の田舎に帰りたくないなあ（かなり失礼）と思つたり、あはは。

「はしゃぐな、子供か！」

僕を親のように注意する武官リホウさま。もうわかつたって！えつ何？こつちに来いって何だよ。するとリホウは僕のツーテールを解きました。

「ちょっと何すんの！思つよりも綺麗な2つ結いにするのが面倒なんだから…」

あつと、忘れている人もいるでしょうか。クゼの容姿は黒髪のツーテールで黒目、白肌のチビです。もう一人で髪も結える大人です。

僕は自分の髪で遊ばれるのはくすぐつたくて勘弁です。だって他人の髪で遊ぶのって子供っぽくないですか。恥ずかしいよ。

無言だけ手先器用なりホウがじたばたするクゼの頭を押さえつけます。

「黙つていろ。もう少しで完成だ、よしOK」

「ええと、えと、鏡、鏡見せてよー。」

理容師さんのように手鏡を僕に向けます。リホウは何故乙女ちっくな手鏡なんてもつているのでしょうか。それよりこの髪型つて。

「ポニーアップだ。別名、関羽スタイル。年相応の女性になるかと思つたら、お前…ふふ、元がガキ臭いからより一層お子様だな」

笑うなよ！それなりの服装をすればクゼだつて大人っぽくなるでしょう。でも僕の身長じゃ着れないんですね。ここで頬を膨れさせると更に子供っぽいと馬鹿にされるでしょう。僕はリホウに顔を見られないよう他のものへ気を逸らせる」とこしました。

「あつ、あんなにいろお土産屋さん

無理やりリホウの手を引いて歩きます。何だか余計に子供くさいようだ。突っ込みないでね。散々、リホウを引っ張り回したのは彼が軍人職で体力があるのを知った上での意地悪です。

僕は遊牧民の血を引く蘭西人なのでこれくらいの移動はへっちゃらなんですよ。それにしても『バクダン』とかいう具のお菓子は美味しいです。あの煙の出る機械を作った人は天才ですね。

おーい、リホウさん。大の大人が女の子の後ろを就職できないフリーターのように哀愁漂わせて歩くのですか。

水路にかかる橋の前でのことでした。乱れた蹄の音が急接近してきました。こんな馬の怒声は辺境の戦場でしか聞いたことありません。

「クゼ、伏せろ！！」

リホウの声を聞いた時には怒った馬の顔と鉢合わせでした。引き殺される…一步手前で馬の腹に張り付いたのは遊牧民の本能でした。腹から反転して、ご婦人の手綱を拝借しました。

「手綱を拝借します！！」

なんとか暴れ馬さんを制御しました。どうぞ。いつもクゼはお馬さんの気持ちが分かる子でいたいですね。僕は寸足らずで大きい馬から降りれず、リホウに手を借りました。

「リホウ、有難う。でも怒らないでよ。お姉さんもお怪我はないですか」

リホウが怒るのは、この男が超過保護な僕のお目付け役だからです。お姉さんは肩で息を切らせています。お水飲みますか。僕は中腰になつて水筒を差し出します。

「ありがとうございます……ぐぼぐぼ……」

「ワイルドな飲み方をする」婦人ですね。県の女性は外見がすらりとして長身で美しいのに意外と男勝りなんですね。お姉さんはお淑やかな声でお礼を述べます。

「至れりつくせりで誠に有難うございます。お礼のしようがあります。私は県の近臣一族の陸家の伯言はくげんと申します。もし宜しければ

我が家へお越し下さいませんか。私の命を救つて頂いたお礼を致したいのです」

むすーとしていたリホウの顔色が変わる。陸家は呉の筆頭株主みたいなものだつて。痛い、違うから殴るの。ええつ大都督の御屋敷だつて（汗）。ところで大都督ってどんなお役職？またゲンコツなの。痛いよ。

「うふふ。大変仲のよろしい親子ですね。是非、わが主よりもてなしていただくよに手配いたしますね」

陸家のお姉さんは口笛で伝書鳩を呼んで、なにやら文をくくりつけて飛ばしました。あれ、鳩にしては大きいよつな。

「鷹よ。わが一族の伝書を司る鳥は鷹なの

うへえ。何かワイルドで一庶民の僕の想像を超えるなあ。リホウも何やら思い悩んでいるようだ。

「大丈夫ですよ。わが主は親蜀派のお方ですから」

そうなの、そうなら大丈夫かな。僕らはおずおずとお姉さんの案内に従いました。歩いていて気付いたんですけど、吳の水路はここで暮らす人たちの生活と深いかかわりがあるようです。行きかう船、そして水場で洗い物をする人たち。何か吳の国もいいなあとクゼは温かい感じを受けました。

そういうしている内に巨大な御屋敷の門に僕たちは立っていました。中に通されると蜀の尚書令舎より広いなんとも風流なお庭がありました。あれ、枯山水の砂の色が赤いよ。

「左様でござりますね、伯約さま。ところで御仁、この紅砂は赤壁の岩を碎いたものでしょか」

うわ、リホウが僕のことを名前で呼んだよ。何、改まっているのだろ？お姉さんは笑顔で答えました。

「そのように伺つております。紅は炎を表す色。強いてはわが吳国でも勝利の色とされ大変縁起の良いとされます。蜀でも高祖さまの

御旗の色、崇高な色で「ヤロコモシヨ」。

お姉さんは侍女さん呼ばれて退席しました。『しほしの庭で』『ることなさつてくだれ』とのこと。やう言われても場違い感がねえ…。するトリホウが両耳たぶを左右に引っ張りました。

「痛いよお、何すんのや」

怒って食い下がった僕にリホウはいつもの由けた顔で囁く。

「おい、お前はクゼかそれとも姜維伯約のどちらなんだ」

何をいまさらと僕は失笑した。リホウは静かに熱くなつてこるようでした。

「いや、満更でもないぞ。陸遜伯言りくそんぱくげん、侮れん奴だ。お前は特に氣をつかるよ」

リホウの声のトーンは、最近になつて10段階でわかるよつになつたのです。今日はめつたに聞かない緊急時のトーンでした。僕は戸惑うだけです。

「うふ、わかつたよ

「おうのかた 装具そうぐと共にあらん」とを

他人の家で戦の前の静けさを漂わせます。僕らは何様なんだろうか。

侍女さんの案内で奥の間に通されました。リホウが侍女さんと国勢やらの大人の会話をしていたので、僕は放置プレーを食らいました。いいもん、クゼは子供でいいもん。

盗み聞きした話では侍女さんの名前は承淵さんしょりゅえんと言つて、若様に断腸の思いで仕えているとか、若様の趣味がド変態で困つているとか、かなり棘のある言い方でした。

誰かの従者つてみんな文句だけ言うのかな。クゼとリホウの関係も

他人事ではないのですから。ちゅうと反省。

しばらくただ広い畳の上でじっと座つて待っていました。ショウヒンさんが襖を両手で開けました。

あれー?…どうこうですか。リホウは顔面の血管が切れそうなほど悪い顔になりました。そして僕の心はここにありますでした。

「騙すつもりはなかったのですよ。私が陸家の主、陸遜伯言でござります。どうぞごめんくださいね。蜀の御使者の方々さるは一コリと微笑みます。ウヘヘ

さつきのお姉さんは煌びやかな着ものを召していました。リクソンリクソンさんは挨拶もそこに行ってしまいました。リホウが悪い夢からもどりつきました。

「何がウヘヘー だ、恥を知れ馬鹿者!」

本田三発目のゲンコツです。とは言え、リクソンさんの御配慮で客間に通されたのですから、ここは甘えましょうよ。僕らはリクソンさんの恩人なのですから。リホウの頬が引くつきます。腕組みをして4発目を我慢しています。

「ああ、あいつは蜀漢にとつての宿敵リクソンだ。夷陵の敗戦、強いては関羽どのを謀殺した奴だぞ」

リホウは恐い顔をしますが、クゼばコネます。

「でもでも、蜀は呉と国交を回復をせんために使者できたんでしょう。過去は水に流せないの？」

「無理だ。俺達の都合は国交回復だが、形としては呉帝の即位式を祝うための使者として来たことになっている。もちろん魏からも使者が来ている。くそ、最悪な気分だ」

僕は胡坐あぐらをかいて首を傾げます。

「いぶし銀の関興さんかんこうさんが使者ならともかく、何で僕らが怒るの?それがに景帝が即位するなら喜ばしこじじやん」

「お前は...」

リホウが感情をむき出しにします。ここまで激しい怒りを見せるのは珍しいことでした。押し込まれて僕は泣きだしそうです。

ただリホウの顔が恐かつたからじゃなくて、リホウは僕の命を心配してくれていたからです。リホウは唇を噛み乱れた呼吸を整えます

「あいつは夷陵ひれいで馬超殿ましょでんを罷に嵌めて、矢の雨で射殺した」

馬超は僕の父。僕は父も母も嫌いでした。幼い僕を辺境の地に捨てたからです。それでも親の敵なのです。もう何も返事が出来ません。怒りの前に恐かつたのです。クゼはもづ、強がりは出来ません。リホウは僕の身体をそつと抱きしめてくれました。涙がじばらく止まりませんでした。ややあって。

「 独りで寝れるかな。クゼの母親な<sup>セキリ</sup>らば例え戦場でも寝られただろ  
う 」

「 むう、馬鹿にするなよ。僕はもう子供じゃないんだ。22歳だも  
ん 」

「 そうかい、お休み。また明日な  
」

しじっと言つて襖を閉めた。独りになると両親のいない孤独を感じた。『 装具と共にあれ 』って、丞相から頂いた『 龍胆 』とかいうブレスレットのことだよね。重い腕輪リングになんの意味があるんだろう。僕の孤独はこんなもので埋まらないよ。いつの間にかクゼは崩れるようつこ寝てしまいました。

伍ゝ夢で誰かの指が僕の口に近づく。星屑のよくな形の粒はかじつたら甘かったです。何だらうこのお菓子。

その時、月明かりに禍々しい鈍色のペンダントが怪しく光りました。闇夜に映る二つの赤い目。殺される！－僕はリクソンさんが同じペンダントを上げていたことを思い出しました。リクソンは僕を殺しに來たのです。

『 いいのか、お前はまだ何者にもなっていない。お前の人生はこん

などいろいろでお終いか、黒星の瞳めを持つ者よ』

「だだだ誰か、僕に武器を下さい。大至急僕に身を守るための武器を下さい！」

『契約完了だ。わが主はこれより妻伯約とする。侵入者を迎撃せよ』

その瞬間、全身の血液が沸騰するようでした。僕は力のコントロールはできません。

UGAAAAAA  
A A A A A A A A ! !

獣のような叫びとともに僕は手にした槍から青い一閃を地まで振り落としました。置が、障子が、床が吹き飛び、赤い砂が血のように宙を舞いました。

リクソンは耐えきました。首に下げていたペンドントが赤い光を

放つ長刀に変わっていました。こんなことが出来るのは恐らく装具だろう。

「フヒヤハハハハ！大したことないな、お前は死刑だ」

柄の方で僕は額をぐるぐる突かれました。死んだように力がなくなる。僕は死んだのか、いいやゲン！」ツツ発分の痛みで覚醒しました。

「いっただあああい！！」

「うぬさあああい！！」

鬪魂一発寝起きビンタをリホウが問答無用で浴びせる。あれ、ここは陸家じゃないよ。どことなく質素で蜀人向けの屋敷。ここは蜀の国だね。

「ちつがーうーー！」

リホウは僕を夢から覺ますために庭へ背負い投げました。砂がぼふんと宙を舞います。あれ、赤い砂だ。追撃で頭上から水が落ちてき

ます。リホウは桶を投げ捨てます。

「お前のよつな阿呆の代表がこの世で息をしているだけ奇跡と思え」

呆れている視線。もしかして、リクソンと戦ったのは夢じゃないつてことかな。頭上から水がまつ一撃。

「左様に御座います。」のくそチビジャリカミ

ショウエンさんの毒舌は寝覚め悪いよ。

「ええ、水浴びはもう宜しいですか、コンペイトー女」

コンペイトーとは僕がリクソンさんの家で貪り食っていた例の砂糖の粒のお菓子です。それと関わりあるか存じませんが、何だか僕の口の中が大変甘つたることになります。

「そりやそうだろう。陸坊にあれだけコンペイトー口に詰められれば、発狂するもんだ。そのまま奴をぶち殺してくれれば、蜀漢のためになつたものも…」

泣いたふりをするリホウをなだめるショウエンさんつて、この三文芝居はなんですか。もし本当ならリクソンさんにお怪我はなかつたのでしょうか。そして僕は蜀の立場を危うくしたんぢゃないでしょうか。膝が笑い出しました。

「何だ、寒いのか？早く着がえろよ。陸坊に会いたくないのか」

僕はリホウたちに促されるままに礼服を着ていきます。僕は今更気付きました。呉帝の即位式か。ショウエンさんは焦つて上手く着れない僕を着せ替え人形のように片付けていきます。なるほど流石リクソンさんのお付きの人です。

「お警めの言葉、有難く存じますが、お手を動かし下さいませ」

リボンで首を絞められました。この人は客人にも容赦ないのね。

式典にはギリギリ間に合いました。ショウエンさんがナビしてくれた呉宮までの最短ルートはかなりダイハードでした。そんな僕の青ざめた顔にトウシさんが「昨晚は大変だったね」と尾ひれがついた方向に励まして下さいました。僕は式典の中でもう一人心ここにあらずの方を発見しました。

「リク様だ。お元気そうでなによりです」

リクソンさんは口から半分魂が出ている感じで椅子に座っていました。可愛らしい手袋をお召しでした。

「ああ、昨晩の一件で爪が割れたんだよ。俺はネイルが出来なくて恥ずかしい…」

「ちゃんとしたリクソンさん、なんか可愛らじい仕草です。

「でも、可愛らじいです。僕は可愛い男の子がすこい大好きですー…」

きょとん。すぐに真っ赤になるリクソンさん。

「くそチビが五月蠅い…昨晩みたてにコンペイターの形にするぞー…」

因みにリクソンさんが男だと知ったのは昨日の夜でした。酔ついたリクソンさんの着ものが肌蹴ていたのですから。たぶん、寝ぼけて動搖したんですね。色々と良くない幻を見た気がします。

後でリホウに聞きましたが、昨夜の僕の暴走は陸邸を何者が夜討ちをかけたことになつていきました。僕の父親の血を受け継いでいたので女装趣味があるリクソンさんに何の違和感もなかったのでした。

リホウが渋い顔をしていた理由です。それとリクソンさんってあの頃はまだ呼んでいたんですね。

六、>本田も蜀の仮屋にリクソンさんがいらっしゃいました。蜀の枯れ木が見たくなつたのさ、とおっしゃいますが実際は政務から逃げて来たんでしょう。

僕は胡散臭い視線を向けながら、今日で3回目ですねと内心思つたのでした。

「ちびクゼにはわびさびがわからないんだな。お子様はこの魂の叫びが全くわからないようだ」

「美しく僕を侮辱しても無駄ですよ。どうせ歯が痛いんですよ」

こんな顔が腫れあがつた顔で政務に出たら嘲笑の嵐だとか思つているんでしょう。コンペイトーばかり食べるからですよ。

猫のように餌づけられる僕も他人事じゃないです。お菓子は食べ過ぎると太っちゃいますもん。デブクゼ。

そう罵りながら、ちゃっかり座り込むリクソンさんは蜀の陣も自分の家状態です。いえいえ、ここは吳の国でした。

「政務は影武者でも問題ない…が、それより蜀との交渉が難航してな」

田が青い伝書鳩がリクソンさんに書を送つてきました。田が青い鳩は吳國主さまの鳩らしいです。それにしても紙の文つて蜀であまりみないなあ。蜀では竹文が主流です。これが経済格差か。

リクソンさんは紙を破り捨てました。貧乏性のクゼには考えられない発想です。どうやら僕に熱い視線があるのは、リクソンさんがクゼを吳の内部事情を聞きだそうとする間者だと思つてゐるようです。そんな忍びの仕事ができるのは止き父だけですよ。3日田でよひややく疑いが晴れかけています。

「ん…お前はなんで吳下りまで来たんだ？」

そう来ますか。頭のいい人と会話するのは答えを予め用意しなければいけないので気疲れします。

「むちむち生のリク様に会いに来たんですよ。好きですもん

」ハーベイターをかじります。ハスロワ調の可愛なお皿し物のリクソ

ンセさんは今日も可愛いです。リクソンさんは上擦つた声で言こます。

「別に嬉しいんだから！それにどういつ意味だよ。もう一度聞くがお前は俺のことがどこまで好きなんだ？」

リクソンさんが真っ赤に茹であがりました。「へへへ可愛い顔。クゼはわざと話を変えます。

「リク様の装具はペンドントなんですね？装具って使用者によって形が変わるものですか？」

魚を逃したといった残念そうな顔を見せます。リクソンさんは一ヒルに戻りました。

「使う人間によってちぎーぜ。武具だから武人が使うことが多い。その関係上ブレスレットタイプがありがちだが、使用者の心を反映するらしい。一説によると装具は、かつて皇族のみが持つことができた玉璽のかけらを元に作られているらしい。形質変化する武具なんて魔力があると考えるのが普通だらう。といひでお前はクロスチヨーカーに治まつたのか」

クゼの装具は前使用者のブレスレットから異教徒のクロスチヨーカーに治まつていました。リクソンさんはこれを可愛いとおっしゃい

ましたが。クゼは異教徒のものに可愛さを感じません。人それぞれなのでしょう。

リクソンさんがゴスロリ趣味なのがいい例ですよ。といふで「ゴスロリって精神性ですよね。リクソンさんは心が病んでいるのですか。

「ああ、国事を任せられているからな。俺は一人称は『私』にしなきやならないし、言葉づかいですら氣をつけなければならぬ。唯一の自由が服装つてことだ」

肩で溜息をなさいます。対して僕は田を輝かせます。

「スゴイですねー。県の影の支配者ですか。政治献金には氣を付けて下さいね」

「誰じゅややう。お前の発想力には脱帽以上に失望する。チビクゼ」

うーんと、『黒星<sup>クゼ</sup>』は僕の本名じゃないですよ。あだ名、通り名といったところです。ところでリクソンさんに呼ぶ名はあるんですか。

「異端の守人<sup>モード</sup>だ」

コンペイトーで僕の頬を突きました。サクリ。モリトは何だかんだで僕と同じ年らしいです。いつも小馬鹿にされます。身長のせいでですか。モリトの馬鹿。後にわかつたのですが、モリトは双子の兄らしいです。それは後談。

七ヶ月長雨の火が続くようになりました。その頃になると蜀の仮屋にも人がまばらになっていました。リホウたちも湖南省まで引き上げていたので、交渉を続けるトウシさんと下働きの僕くらいがこの屋敷に残っていました。

頬の腫れがひいたモリトも政務が忙しくなつてきいたらしく久しく会つていませんでした。夜討ちの一件で僕は呉の土地に軟禁されました。ぶっちゃけ暇です。屋敷にいても掃除くらいしか仕事がありません。

「暇だよお…蜀に帰りたい」

かつと閃光が横殴りの雨粒に反射します。ややあつて大きな音。雷は人類に火を使つきっかけを与えてくれたんで僕は畏敬するだけです。

どどーん。ひつ嘘です。『めんなさい。やっぱりクゼは雷様が苦手です。僕がネズミのように震えているところに近づく人影があります。

した。」ぐつ、とクゼは睡を飲み込みます。

「どちら様ですか。トウシ様はまだお帰りでありますよ」

雨粒を空切る刃の音で目が覚めました。反射的に身体を反転し避けます。

「僕の装具を解放するべきか…いや、失敗は許されない。まず落ち着こつ」

敵が何人かわからない中で制御不能な装具を使うのは危険です。僕は物陰に身を隠し様子を窺うことにしました。がたんがたんと物が崩れる音がします。吳には水賊が現れると聞きます。連中は水賊でしょうか。

「いや、ちづーよ」

背後を取られて僕は動転しました。開きかけた口を見覚えのある細く長い綺麗な指が塞ぎます。モリトだ。僕の瞳孔は大きさを元に戻しました。静かにと指を唇にあてるポーズ。

「こいつらは魏の下つ端だろ?」ついさっき吳は蜀と国交を回復した。その腹いせつてところか。面倒だ。クゼ手伝え、蹴散らすぞ」

そう言ってモリトは奴らと戦闘を開始しました。涼しい顔で家を破壊しつつ、奴らを吹き飛ばしていきます。刃先のないトンファーミたいな双戟でした。殺す気が全くないのが装具に反映されているのでしょうか。

僕も装具に念じます。刃先のない槍で応戦です。掴みにかかりくる人間の力を利用して投げ飛ばし、棒きれでみね討ちに突き飛ばします。

四半刻もしないうちに水賊もどきたちは足をひきずつて闇の中へ四散していきました。僕は安心しきって、装具をチヨーカーに戻してしまいました。

「ふう、モリトありがとう」

何の冗談でしょうか。モリトは僕の喉元に刃先のある長刀を向けます。

「クゼ、落ち着いて装具を外し、床へ置いてもらおつか」

本当の敵は身内にありました。クゼは目を伏せ、モリトに従い装具を外しました。国交回復の足枷はどうやら僕のようでした。丞相す

みません。

クゼは両手足を縛られ、口と目を布で覆われていました。モリトは僕をすぐに始末するような真似はしませんでした。それにここは遠く異国之地。僕に逃げ場はないのです。モリトの私兵が僕に行動を起しきれないように、槍先を向けている殺氣が常にありました。

河を渡り、馬で何里も走ったようです。僕はどこへ連れて行かれたのでしょうか。そして今、僕は陣屋の柱に手足を結ばれています。布が外され、目と口は開けるようですが、恐くてできません。

「クゼちゃん、田を開きなさい」

モリトのような女性の声が聞こえます。僕は首を横に振りました。

「おい、チビクゼ。俺様が田を開けつて命令しているんだよ

モリトの指が強引にクゼの両目を開けました。痛いって。あれ…モリトが2人。一人は僕の知っているゴスロリ調の服装のツンツンとした感じのモリト。もう一人はクゼの知らない忍びっぽい軽装で微笑む女性でした。モリトは企み笑みをニヤリと見せます。

「さて作戦開始だ」

「こはぢやから蜀でも呉でもない魏国のようです。クゼこは嬉しい懷かしい空氣です。

呉での暴動はクゼに責任があり、クゼは魏のスパイとして手足を縛られたまま、囚人が入れられる鉄格子の子になつていきました。この辻棲合せにクゼの命は瀬戸際でした。

衛兵に蹴り飛ばされ、クゼは合肥城主様の前に無様な形で放りだされました。モリトは僕に配慮することなく、仕事を切り出しました。

「我が呉国が良ければそれで良いのです。しかし一害あって利益なしでは呉候様の御顔が立ちません。私の言つていることは御理解頂けますか」

営業スマイル。その優顔に大の男が唸り続けるのが閑の山だった。すかさず追撃のモリト。

「さようでござりますか。魏国の判断が漢王朝の判断と受け取りますよ。御手が煩わしいのであれば…この私が！！」

モリトがクゼの喉元に装具の剣を当てます。城主様は進退が極まつていました。額から汗が噴き出ます。

「あ…待ちこやー。呪候さんの要望は何やー。」

装具解除。外交は王手です。一瞬モリトは笑みを浮かべました。クゼは自分の無実を哀願します。こんなで城主様を落とせるのでしょうか。

「死にたくない！私は無実です！呪は蜀の使者である私を魏に売つたのですー！」

城主様の田の色が変わります。ギリギリの決断が折れたようでした。

「ああ、やつなんや。ちょい待ちー、呪の陸さんよ。あんせんら、また俺らに厄介を押し付ける気か」

モリトが殺氣を消して笑う。扇子がぱっと開き口元を隠す。

「また、とはですか。いいえ今回は今回ですよ。关羽の首に比べたら、貴方様にとつて容易いものでしょ。何ならこの城を明け渡してもいい、手打ちにしましょうか。いずれにせよ、我が国での騒動は漢王朝に御裁可を頂かなければなりません。漢王朝の臣である貴

方様であれば、このよきな事は些事だとも見受け致しますが

僕の命といひの城を天秤にかけるのが、どうやらモリトの狙いらしいです。しかし前例が重いためにクゼの命を断てないようです。苦しみに城主様は言いました。

「俺の範ぢゅうを越えどる問題や。朝廷の御裁可をすぐに仰ぐ。勘忍してくれ」

クゼの命は何とか助かりました。モリトに引っ張られ外の陣屋まで戻りました。これで何が変わったのでしょうか。

「御苦労さま。クスクス、お兄様も人が悪いですね。あの城主が関羽の子供と知つて、蜀のクゼちゃんを差し出しますか」

「ちづーよ。筋の通らない話をして、あいつを揺さぶつて見ただけだ。俺はあの城主とクゼの関係を知つているから出来たわけさ」

モリトは自画自賛しているようでした。縄を解かれても僕はモリトの言つていることが全く理解出来ませんでした。これだからお子様は、とモリトは両手の平を広げました。

「おい、我が妹にして我が影よ。この馬鹿クゼに7歳児でもわかる

よつて説明してやれ

妹さんは首をかくりと下に落としました。めんべくせえ、と言つてモリトに動きが似てました。ここに笑い続けているので何かモリトより恐い感じがします。

「はじめましてかな、クゼちゃん。私はモリトの妹で周循シヨウジンと言います。普段は兄の陰口向で行動しています。本来の私は病弱ヒョウナクつな設定なので、表舞台にはません」

作戦の意図と関係ないよね。クゼの頭に『?』がまたつきました。モリトは鼻で笑い飛ばしました。

「誰がてめえの血け紹介しつゝ言つた?仮面かぶせて病原菌バウジンばら撒く女に戻すぞ」

つまり、ジョンさんはモリトがやりたくない仕事をやつしているのかな。この前、歯が痛くて政務をさぼったとか。それと蜀の陣が魏の刺客に襲われたとき、モリトがいち早く駆けつけた理由とか。あと僕は常に見られている感じがしたもの。なるほど、なるほど。僕は手のひらをポンと叩きました。

「え…どうやら今回の俺様の素晴らしさに作戦によつやく気付いたか

モリトは僕の様子に勘違いしたようです。

「おいジョン。このチビを湖南までマツハで送つてやれ。くれぐれも蜀の方々に無礼のないようにな。それと、チビクゼ…この合肥に来た経緯は蜀の連中に言つくなよな。もじばらしたらてめえの穴という穴に突つ込むからな…」

何を突つ込むのかとは恐くて聞けません。モリトは二ヒルに笑いました。

「魏と戦をするきっかけになるぜ。けけれ、合肥城主は離間の刑を」

ジョンさんに眠り薬を口に当たられたクゼは気がつくと船の上でした。あれ何でこんなに早く船の上なのでしょつか。

「それはオレがこの馬を合肥からぱくつてきたからだ」

モリトのゴスロリ装をしたジョンさんでした。モリトが揺れる船上で馬に乗れるはずがありません。真っ赤な馬ですね、どなたの馬ですか。ジョンさんは蘭西人顔負けで器用に馬を操り下馬しました。

「うふふ、お兄様に似てたかしら。クゼひやん、この馬は『赤兎』セキト」

「いって関羽様が死ぬまで愛した名馬です。お兄様がクゼちゃんにこの馬の主人になつて欲しいとの伝言を承っています」

船頭さんが船を進める音だけになりました。クゼは頭が真っ白です。蘭西人に馬をプレゼントするのは求婚の意味があるんです。リセツト。でも関羽將軍の息子さんの合肥城主様はどうなるんですか。僕と関わりある人らしいので心配です。

「ええクゼちゃんが合肥城主の張虎さまを心配なさるのは当然ですよ。彼は貴女のご親戚ですから。詳しく申し上げますと貴女のお母様のお姉様の御子息です。三親等ですね」

何かモリトに僕の血縁まで握られている感じはあまり気分がよくなっていますね。クゼには長江が揺れていますように思えましたが、実際はクゼの身体が揺れていきました。色々あり過ぎてショート寸前です。モリトになりきったジュンさんに湖南省公安まで送つて頂きました。

ハゝ僕は久々に蜀の面々と再会しました。やつぱりリホウには怒られました。というか泣かれました。義理の親でも心配してくれたのです。クゼは反省しました。

僕はそんな訳でリホウたちと顔を合わせ辛くて、一人で湖面近くの丘に座つて考え方をしていました。

「僕は戦えるのかな… 戦争はもつ嫌だよ… 父上」

僕の心中は穢やかではありませんでした。僕は吳の大都督の陸遜伯言に恋をしていました。

でも彼は夷陵の戦いで多くの蜀の兵士を殺しました。そして何より父上である馬超<sup>ハチヨウモウキ</sup>孟起<sup>モンキ</sup>の敵です。戦争になつたら僕はモリトに対する思いが変わつてしまふかも知れません。

それに蘭西の辺境で異民族同士の戦いは経験してきました。人の死に鈍感になつてしまふのが恐いんです。クゼは気付いていました。自分は装具を持った時にモリトを殺そうと血が沸騰するほど興奮していました。装具を持ち続ける限り、僕は人を傷つける。

「あれ、首にチョーカーがない。モリトに取られたままだった」

クゼの口から零れた笑い声は薄い平淡なものでした。これでいい。僕は文官として生きる。同時に蘭西人として戦う本能を捨てる寂しさを感じました。

「クゼはあんまり変わらないね。また誰かにいじめられたのかい」

その声に思わず顔を上げました。クゼは涙を拭ぐのも忘れて、懐かしさと戸惑いの中にいました。

「陳祇<sup>チング</sup>? なんで奉宗<sup>ホウソウ</sup>が湖南にいるの?」

ホウソウはクゼが蜀にきて間のない頃からの親友です。優しい反面、良くも悪くも目立たない中肉中背の男性なので『影が薄い』と揶揄<sup>なげ</sup>される彼ですが、泣き虫のクゼはよく彼に慰められたのでした。

「今日はクゼを慰めにきたんじゃないんだ、ごめん。丞相の使いだよ

申し訳なさそうに彼は言います。ホウソウは丞相の達筆すぎる文を僕に手渡してくれました。まさか帰りが遅いから左遷とかじゃないよね。最初は僕が魏国へ寄り道したのを見透かしたかのような内容でした。簡単にいうと陸遜と仲良くなりましたが、と書かれていました。次からが本題。

雲南遠征。呉との同盟が復活した今、蜀に東の憂いはなくなりました。つまり魏に臣下の礼をとる南蛮夷を平定するため、戦いが始まろうとしているのでした

「嫌だー!」

僕は始めて丞相の命令に反抗しました。僕は戦争に従軍しなければなりません。でも人の命を奪うクゼはクゼでなくなるのです。

ホウソウは僕に何も言いませんでした。湖面は戦の前で波一つ立ちません。これが戦前の静けさでしょう。ただ一人揺れ動く僕は未来を信じられなくなりました。

To be continued  
GARYOTENSEI 222 (3)

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9287o/>

伏竜天晴222～(2)呉との再同盟～

2010年11月16日18時35分発行